

平成21年 5月18日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18592347

研究課題名（和文） 出産準備教育の効果に関する縦断的研究

研究課題名（英文） A longitudinal study on effects of childbirth education for pregnant women

研究代表者

亀田 幸枝 (KAMEDA YUKIE)

金沢大学・保健学系・助教

研究者番号：40313671

研究成果の概要：本研究課題は 1) 妊婦の心理的エンパワメント尺度の作成および信頼性・妥当性の検討、2) 心理的エンパワメントを評価指標に用いて出産準備クラスの効果に関する検討を行った。妊婦の心理的エンパワメント尺度は 5 因子 27 項目で構成され、信頼性と妥当性は概ね支持された。出産準備クラスの効果に関する調査から、出産準備教育は妊婦の心理的エンパワメントを左右し、講師の話に対する有益感、クラス参加による安堵感や満足感を感じにくいとエンパワメントを低下させる可能性があることが示唆された。また、妊婦の心理的エンパワメントはその後の行動変容に影響することから心理的エンパワメント支援の意義が示された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	690,000	3,890,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：出産、教育、効果、縦断的研究、妊婦

1. 研究開始当初の背景

コクランシステマティックレビューでは出産教育の有効性は未知であることが示され (Gagnon, 2000)、特に国内では健康教育の評価方法や評価指標が未発達であることが指摘されている (武藤, 1994)。このような背景の中、我々は、出産教育の評価指標として、出産時のストレスや痛みなどの対処行動に影響すると考えられていた (Manning,

1983: Lowe, 1991) 自己効力感に着眼した。欧米ではすでに、出産時の対処行動に対する自己効力感を測定する尺度開発や関連要因の検討が行われていたが (Lowe, 1993: Drummond, 1997: Sinclair, 1999)、欧米と日本では出産文化や痛みに対する考え方が異なるため、国外で開発された尺度をそのまま使用することには限界があると考えられた。そこで、我々は、出産に対する自己効力感

の形成プロセスや関連要因について質的・量的に検討し、(H14～H15年度：文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)、島田他、2000：亀田他、2003・2002・2000)。(それと併行しながら尺度開発研究に着手し継続的に検討してきた(島田他、2000：亀田他、2005)。また、この自己効力感が出産準備教育の評価指標として妥当なものであるかを検討していくために、出産準備教育の効果に関する概念モデルを作成し分析した。分析結果より、自己効力感とは出産準備感(出産準備への充実感)と関連しながら、出産時の対処力を高め満足な出産体験につながることで、さらに、出産をのりこえ母親になっていく女性の自己成長感に影響することが示された(亀田、2004)。この成果は、妊娠中に妊婦の自己効力感や出産準備感を高めることの意義を支持し、これらの指標が出産準備教育の評価指標の一つとなりうることを示したといえる。妊娠週数別に出産に対する自己効力感レベルを比較した報告(亀田他、2002)では、初産婦の自己効力感とは妊娠週数が進むと低下する傾向にあり、経産婦では逆に高まる傾向にあることが示唆された。しかし、この知見は横断的調査から得られたものであるという限界がある。また、自己効力感とは出産準備クラスの参加前後で高まる傾向にあると示唆されているが(中田他、2000)、これは短期効果であり、クラス後の自己効力感レベルを縦断的に調査した研究は国内外で検索できなかった。そこで、出産準備クラスの効果を縦断的に調査するという着想に至った。

本研究課題は、出産準備クラスの効果の有無とその持続的効果に関する一資料となり、出産準備クラス後のフォローアップの必要性やその時期についての示唆が得られ、出産準備教育のプログラム作成に貢献できると考えた。

2. 研究の目的

出産準備教育のエビデンスを探求し、質の高い出産準備教育を提供することを視座に据えている。本研究課題は、出産時の対処能力を高め妊婦に自信をつけることを目的として実施されているクラスの効果を検討することとした。これまでの研究成果によって出産体験と出産後早期の女性の心理的成長

に影響することが示された“出産に対する自己効力感(出産時のストレスや痛みなどの対処行動への自信感)”や“出産準備感(出産準備行動の主観的評価)”のレベルを縦断的に調査する。準実験的デザインを用いて、出産準備クラスで行われている出産準備教育を介入(操作)とし、出産に対する自己効力感(以下、自己効力感)と出産準備感を評価指標として、出産までに出産準備教育の効果がどれくらい持続するののか否かを検討することとした。

3. 研究の方法

出産に対する自己効力感等を評価指標に用いて、出産準備クラスを対象に予備調査を行った。出産準備クラスの目的によって調査対象となるクラスが限定されることはある程度想定していたが、出産準備クラスが多様化している中、より適応範囲の広い評価指標への改善・検討が必要であると考えられた。近年、出産準備教育のねらいは妊婦のエンパワメントを支援するという考え方が広まっている。自己効力感をキー概念に含むこのエンパワメントを評価指標に用いることで、調査できるクラスの適応範囲が広がることが推察された。国内外で妊婦のエンパワメントを測定する用具は検索できなかったため、これまでの研究成果を基盤に、本研究課題の計画を1)エンパワメントを測定する用具の作成と信頼性・妥当性の検討、2)出産準備クラスの効果に関する縦断的調査の2点に修正し、以下の研究方法で遂行した。

1) 妊婦の心理的エンパワメント尺度の作成と妥当性・信頼性の検討

(1) 尺度原案の作成

エンパワメントに関する文献レビューを母性看護および他分野から行い、助産学研究者3名と出産前教育のエキスパートで内容妥当性の検討を重ね、妊婦5名のプレテストから表面妥当性を検討した。尺度原案は、8つの下位概念；自己効力感、コントロール感、イメージ・目標の具体化、セルフエスティーム、心的エネルギー、健康への責任感、情報・資源の選択・活用、周囲からの支持・保証を含む計42項目で構成した。

(2) 尺度の妥当性・信頼性の検討

2007年5月、北陸地方の産科施設で健診

を受けている妊婦 173 名を対象に、同意を得た上で無記名自記式質問紙調査を行った。分析には、統計解析ソフト SPSS for windows14.0 を使用した。

①項目の選定：Item-Total 相関（以下、I-T 相関）と探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）により、削除項目を検討した。削除基準は、I-T 相関 0.3 未満、因子負荷量 0.3 未満あるいは複数因子に因子負荷量が高い項目とした。

②妥当性：構成概念妥当性は探索的因子分析から、基準関連妥当性については Locus of Control 尺度（以下、LOC 尺度）との相関関係から検討した。

③信頼性：Cronbach's α 係数から内的整合性を検討した。

倫理的配慮については、金沢大学医学倫理委員会の承認を得た。

表1 調査時期と調査内容

調査内容	調査時期		
	クラス前	クラス直後	1ヶ月後
妊婦のエンパワメント(27項目)	○	○	○
クラス評価(10項目)		○	
行動変容:セルフケア・出産準備(7項目)			○
属性等	○		○

2) 出産準備クラスの効果に関する縦断的調査

北陸の産科 4 施設で開催された出産準備クラスに参加した妊婦を対象に、クラス前、クラス直後、クラス後 1 ヶ月の 3 時点で質問紙調査を行った。調査時期および調査内容の概要は表 1 に示した。高得点ほど、妊婦のエンパワメント、クラス評価、行動変容が高くなるよう得点化した。分析方法は、差の検定には t 検定（対応あり、対応なし）またはノンパラメトリック検定、関係性については Pearson's 相関係数や Spearman's 順位相関係数から検討した。影響力については、重回帰分析から検討した。

4. 研究成果

1) 妊婦の心理的エンパワメント尺度の作成と妥当性・信頼性

妊婦 173 名（回収率 100%）から回答が得られ、有効回答 171 名（98.8%）を分析した。

(1) 項目の選定と尺度の因子構造

I-T 相関 0.3 未満の 5 項目を削除してから

因子分析を行い、最終的に 5 因子 27 項目を採用した。第 1 因子「自己効力感」(6 項目)、第 2 因子「将来のイメージ」(6 項目)、第 3 因子「セルフ・エスティーム」(7 項目)、第 4 因子「周囲からの支持・保証」(4 項目)、第 5 因子「家族が増える楽しみ」(4 項目)と解釈できた。

尺度原案では 8 つの下位概念を設定したが、本尺度は 5 因子 27 項目で構成された。この 5 因子は、先行研究の概念分析結果や看護学における他分野のエンパワメント尺度で位置づけられている主要概念と相応したものと解釈でき、構成概念妥当性は支持できると考える。

(2) 基準関連妥当性

LOC 尺度得点と本尺度の相関係数は $r=0.517$ ($p<.001$) を示した。比較的強い正相関を示したことから、内的統制志向が高ければ物事に対して主体的に取り組みやすくエンパワメントが高いという関係が示され、基準関連妥当性は支持されたといえる。

(3) 信頼性

尺度全体の Cronbach's α 係数は 0.89、下位尺度の Cronbach's α 係数は 0.80~0.67 であった。第 5 因子のみ 0.7 未満を示したが、内的整合性は概ね支持された。

2) 出産準備クラスの効果に関する縦断的調査

130 名に質問紙を配布し、有効回答はクラス直後で 125 名、クラス後 1 ヶ月で 61 名であった。

(1) クラス参加によるエンパワメントの変化

クラス後にエンパワメントが高まった妊婦（以下、上昇群）は 101 名（80.8%）、逆にエンパワメントが低下した妊婦（以下、低下群）は 24 名（19.2%）であった。

(2) クラス後 1 ヶ月のエンパワメント

上昇群の 1 ヶ月後のエンパワメントは 87.4 ± 9.4 点（平均 \pm SD）であり、クラス直後 89.0 ± 9.3 点よりも低下傾向を認めたが、クラス前 82.5 ± 9.8 点よりも高かった ($p<0.001$)。一方、低下群の 1 ヶ月時の得点は 86.3 ± 10.2 点であり、クラス直後 86.8 ± 11.2 点から変化せず、クラス前 88.2 ± 10.8 点よりも低いままであった（図 1）。

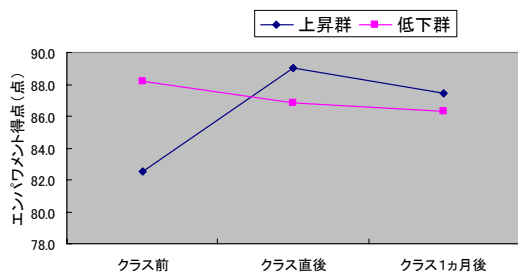


図1 エンパワメント得点の推移

(3) エンパワメント上昇群・低下群別にみたクラス評価の比較 (図2)

クラス評価の各項目を上昇群と低下群で比較した。講師の話、安堵感、参加満足感の3項目において、上昇群の方が低下群よりも有意に得点が高かった ($p < 0.05$)。

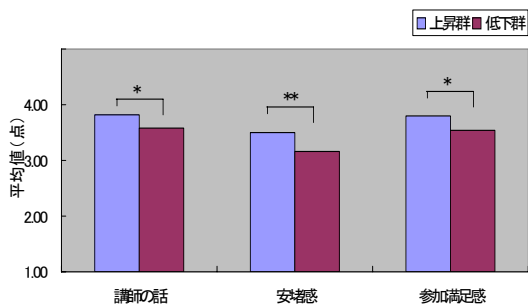


図2 エンパワメント上昇群と低下群別に分けたクラス評価の得点比較

(4) クラス後1ヶ月時における妊婦の行動変容(セルフケア・出産準備行動)への影響要因

クラス後1ヶ月時の妊婦の行動変容に影響力を示したのは、クラス直後のエンパワメント ($\beta = 0.43$, $p < 0.001$)、クラスで自由に質問・発言ができた ($\beta = 0.24$, $p < 0.05$) ことであった ($R^2 = 0.32$)。

以上(1)～(4)の結果より、以下の知見および示唆が得られた。

- ① エンパワメントは出産準備教育等の介入によって変化し得るものであり、操作可能なものである。
- ② 出産準備クラスは妊婦の心理的エンパワメントを上昇させる一方で、講師の話に対する有益感、クラス参加による安堵感あるいは満足感が感じにくいとエンパワメントを低下させる可能性がある。
- ③ クラス後に低下した心理的エンパワメントは何らかの刺激要因がないと回復しにくいことが推察される。
- ④ 心理的エンパワメントは、セルフケア・出産準備行動といった行動変容に影響する要因と考えられる。出産準備教育等を通じて妊

婦の心理的エンパワメントを支持していくことは、その後の行動変容を支持すると考える。

本研究課題は、心理的エンパワメント尺度の作成と、この心理的エンパワメントという新たな指標を用いて出産準備クラスの効果に関する検討を行った。

妊婦の心理的エンパワメント尺度は国内外ではまだ検索できず、本研究課題は先駆的取り組みであると考えている。エンパワメントを客観的に数量化できることによって、関連要因の検討、エンパワメント支援の効果に関する実証的研究への発展が期待できる。また、パワーレス状態の妊婦の把握が可能となり、妊婦のエンパワメント支援に貢献できると考える。尺度開発は数年から数十年かかるとも言われている。臨床での適用範囲や適用性について今後さらに継続検討することが課題である。

また、出産準備クラスの効果に関して1ヶ月時点まで追跡調査した。これにより、妊婦の心理的エンパワメントを支援することの意義と出産準備クラスを通じてエンパワメントを上昇させることが可能であることがわかった。今後、対照群の設定や準実験デザイン等を用いるなど、研究デザインを進展させクラス効果を検証することが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① Yukie Kameda, Keiko Shimada(1番目): Development of an empowerment scale for pregnant women, Journal of the Tsuruma Health Society, 32(1), 39-48, 2008, 査読有.

〔学会発表〕(計3件)

- ① 亀田幸枝、島田啓子、田淵紀子他: 出産前教育における妊婦のエンパワメントに関する文献レビューと概念の検討、第22回日本助産学会学術集会、2008.3.14-15、神戸.
- ② 亀田幸枝、島田啓子、田淵紀子他: 出産前教育におけるエンパワメント尺度の信頼性と妥当性、第27回日本看護科学学会学

術集会、2007. 12. 7-8、東京.

③ 亀田幸枝、島田啓子、田淵紀子他：出産準備クラスの中で出産教育者が感知する妊婦のエンパワーメント、第 26 回日本看護科学学会学術集会、2006. 12. 2-3、神戸.

[その他]

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

亀田 幸枝 (KAMEDA YUKIE)
金沢大学・保健学系・助教
研究者番号：40313671

(2) 連携研究者

島田 啓子 (SHIMADA KEIKO)
金沢大学・保健学系・教授
研究者番号：60115243

田淵 紀子 (TABUCHI NORIKO)
金沢大学・保健学系・准教授
研究者番号：70163657